

安楽寺だより

平成26年冬 No.18号

光 寿 無 量

寒い日が続いていますが、いかがお過ごしでしょうか。昨年は、皆様のご厚意により御手洗いおよび境内の改修が、無事に終了いたしました。心より感謝申し上げます。洵に有難うございました。つきましては、お披露目式は、別欄にてご案内申し上げます。皆さま是非ご参加下さい。

さて、近年、葬儀についての問題が、クローズアップされてきました。一極集中型社会などの変化がその一因であると思いますが、合理的だからという理由で安易に葬儀を済まそうとする傾向には、寂しい思いをいただきます。

この周りには、聞きなれない言葉ですが、直葬（じきそう・ちやくそう）なるものが、関東を中心に行われています。葬儀をせずに火葬するやり方です。「仏教徒じゃないから、無宗教だから葬儀はしない」と主張される方もいるようですが、葬儀は、仏教に関わらず、ずっと古来より行われてきたわけで、信仰がどうのこうのという問題ではありません。大切な人とお別れをしてゆく時間が私たちには必要なのです。震災の後、「せめて葬儀だけでも」という声が聞かれました。お別れの時間とともに、ちゃんと感謝を伝えることができる時間が葬儀のときです。



仏教各宗派においても葬儀は、大切に説きます。今生の迷いの世界から悟りの世界に送り出す儀式となるのです。浄土真宗でも、同じ考えを持っていますが、葬儀に参列された方ならお解かりの通り、浄土真宗の葬儀は、必ず親鸞聖人の「正信偈」をお

勤めします。「正信偈」の中に、

「往還廻向由他力」

（往くも還りも皆他力）と私たちの、進むべく道が、はっきり示されているからです。

往相と還相の二つの回向とは、わかりやすく言いますと、阿弥陀さまにお浄土に導かれて生まれ往くことが、往相であり、浄土にて仏となり再びこの世に還りて、私たちをお浄土に導く助けをすることを還相といいます。

つまりは、「死んだら終わりの人生ではない」ことが浄土真宗の大事な思いです。今生のいのちが尽き果てても、その続きがあるのです。

仏になりて、この世に舞い戻り、次のいのちを導く、「還相の菩薩」となって今生で迷っているものを導いていくということです。

自らの一生を思い返す時、

「人生の尊さ」「いのちの大切さ」「他人を思いやるころ」、「感謝のころ」、「お念仏のころ」、何一つ自分ひとりではつくり上げられなかったこと、自分の努力によるものではなかったことに気づきます。大切なものは、自分では気づかないうちに、いただいたものが多いのではないのでしょうか。



釋 芳英